

神通力の獲得方法

佐々木 閑

仏教の聖典にはいたるところに神通力の描写がでてくる。仏陀を初め、有名な弟子達の多くが神通力の達人である。仏陀殺害を目論んだ、かの悪人提婆達多でさえ神通力をあやつった。仏教は神通力の獲得を最終目標とする宗教ではないが、解脱にむかって修行するうちにいつしか不思議な力が身に付くものと考えられたのである。最初期の阿含経の段階では、神通力の獲得についての一般則などは存在しなかったが、阿含の教義が体系化されたアビダルマの時代になると、神通力は修行の必然的成果として修行階梯の中に含み込まれるようになる。アビダルマでは、凡夫が修行によって次第に煩惱を減していつて解脱に至るまでの階梯を細かく規定するようになる。いわば修行のマニュアル化である。そしてこの中、禅定と深く結びついたかたちで神通力の獲得が位置づけられるのである。したがって、神通力は、修行しているうちになんとなく身に付くというものではなくなった。これこれこういう修行が達成された時点で、こういう神通力が使えるようになるというはっきりとした基準ができたのである。大乘が勃興して、それまでとは異質の解脱手段が説かれるようになると、このアビダルマの解脱マニュアルも一般性を失っていくが、それでも声聞乘(いわゆる小乗仏教)の世界では変わらず保持されていった。中国や日本など、声聞乘と菩薩乘が入り混って受容された仏教世界では、このようなアビダルマの体系は、仏教思想の基礎知識としての役割は残していたものの、実際の修行マニュアルとしてはもはや機能しなくなった。したがって、神通力も、確かに高德の僧なら身に付けていても不思議はないが、具体的にどうやったら身に付くのかという実際の獲得方法まではいちいち考慮しないというのが常識となった。たとえば禅宗であるが、もし禅がアビダルマの修行階梯に組み込まれたかたちで受容

2 神通力の獲得方法

されていたなら、それは神通力の獲得と必然的に結び付いているのだから、禅宗は神通力のセンターになっている筈である。ところが実際は禅宗と神通力の結び付きは薄い。禅者の神通力が全く否定されているわけではないが、かといって表舞台に現われるわけでもない。これは禅宗の禅が、アビダルマの禅と違うからである。このように我々は、自分達の仏教受容の特殊性から、神通力を極めて臆ろ気なものとして理解してしまう。しかし先にも言ったように、アビダルマ体系を保持する仏教世界では、神通力は得るべくして得られる必然の力である。ではどうやったら得られるのか。本稿では、その方法を、最も整った修行マニュアルの一つである、Buddhaghosa 作 Visuddhimagga に即して説明していく¹⁾。Visuddhimagga は紀元後 5 世紀前半、インドからスリランカに渡った Buddhaghosa が、すでに存在していた修行テキスト Vimuttimagma を再構成してつくった本である²⁾。したがってこれは、数ある仏教部派の中のわずか一派に伝わる教えなのだが、これほど具体的に神通力の獲得方法を説明する文献が他にないこと、そして Buddhaghosa の属していたスリランカ Mahāvihāra 派の聖典が、南方上座仏教の主流になっていることを考えれば、この資料を用いるのが最適なのである。

神通力を得るためには、まず準備段階としてある程度の強度の精神集中が必要である。禅定の段階でいうと第四禅である(禅の五段階説でいえば第五禅)。禅定には第四禅のうえにも空無辺処ないし非想非非想処といった上位の段階があるが、神通力を得るためには、第四禅まで昇っておけばいいのである。この段階に到達して初めて神通力が使えるようになる。そこでまず、第四禅までの到達方法を説明しよう³⁾。第四禅まで昇るためには、まず初禅から出発しなければならない。禅定に入るためには業処というものが必要になる。業処(kammaṭṭhāna)というのは、禅定の所縁、すなわち精神集中を行なう場合の集中対象である(その所縁によって得られる禅定を指すこともある)。たとえば、地遍と言われる業処は、土でできた特定の物体であり、それを見つめることによって精神の集中度を次第に高めていくのである。業処は全部で四十あり、目的とする禅定の種類によって使用する業処の種類も違って来る。本稿で問題となるのは初禅から第四禅

の四つの段階であるから、それらを得るために用いられる業処のみを示してお⁴⁾く。

- 初禅 — 十遍 (dasa kasiṇāni), 十不浄 (dasa asubhā), 身至念 (kāyagatā sati), 安般念 (ānāpāna sati), 四梵住のうちの慈・悲・喜梵住 (mettā, karuṇā and muditā brahmavihārā)
- 第二禅 — 十遍, 安般念, 四梵住のうちの慈・悲・喜梵住
- 第三禅 — (同上)
- 第四禅 — 十遍, 安般念, 四梵住のうちの捨梵住 (upekkhā brahmavihāra)

十遍とは地, 水, 火, 風, 青, 黄, 赤, 白, 光明, 限界虚空の十の所縁, 十不浄とは膨脹, 青痣, 膿爛, 断壊, 食残, 散乱, 斬斫離散, 血塗, 虫聚, 骸骨といういわゆる不浄観の十段階, 身至念とは身体の各部位に対して思いを凝らすこと, 安般念とは自分の呼吸に思いを凝らすこと, 四梵住は衆生に対しておこす四種の心すなわち四無量心のことである。これらのうちどれかを選んで精神集中の対象とし, 繰り返し修することによってそれぞれの禅定段階に到達することができるのである。どれを選ぶかは, その人の性格や資質によって変わってくるのであって, 適宜選択すればよい。たとえば十遍の第一, 地遍はどんな人にも適する業処であるし, 十不浄はいずれも食欲の強い人に向いている, といった具合である。⁵⁾ただ, その場合, どの業処を選んでも, 到達する境地に変わりはない。地遍を用いようが水遍を用いようが, 到達した禅定の状態は全く同じなのである。

さてそれでは具体的な修行方法に入ろう。まず修行場所を決めなければならない。業処を正しく修するためには, 先達から正しい教えを受ける必要がある。一人であれこれやってみても, 出発点の業処が間違っているとなんにもならない。そのためにはすぐれた先達 (和尚, 阿闍梨あるいはその他の専門家) がいる精舎に住まねばならない。選ぶべき精舎の条件としては, すぐれた先達がおり, 村落から遠からず近からず, 日用品の施受には不自由しないが, かといって訪問者の喧騒で修行が妨げられることもない, そういった点が充足されねばなら

4 神通力の獲得方法

ない。場所を定めたら、身のまわりの些事に気をとられないことがないよう、身綺麗にする。髪や爪は切り、衣や鉢も汚れていたら綺麗にしておくのである。そこでいよいよ業処を用いた精神集中にとりかかる。Visuddhimagga では、具体例として十遍の最初の地遍をとりあげているのでここでもそれに従うことにする。地遍⁶⁾とは土でできた物体であるが、過去世においてすでに地遍による禅定獲得の経験があるようなすぐれた資質を持つ者は、わざわざそのような物体を作らなくても、自然の農耕地を見つめるだけで禅定に入ることが出来る。しかし全くの初心者にはそれは無理なので、人工的な対象物を作らなければならない。地遍には持ち運びのできるものと、地面に据え付けるものの二種類があるがいずれも形は円盤状の土の板である。円盤の大きさは直径一わたりと四指、土は青、黄、赤、白といった原色のものは避け、ガンジス川の土のような赤茶色のものを用いる。あたりを掃除し、沐浴したのち、この地遍の近くに椅子を置き、そこに坐ってこれをじっと見つめる。あまり目を開き過ぎると疲れてしまい、細目になっていると寝てしまうから、適度に目をひらいて見つめ続ける。その際、土の色や外見に心を奪われることなく、「土」という概念に心を集中する。そして何度も「土」「土」と唱えるのである。こうしているうちに、目を閉じて心の中に、目で見たと同じ様相が浮かぶようになる。これを取相(uggaha nimitta)と呼ぶ。取相はもはや眼の対象ではなく心の対象である。つまりこの段階で修行者は外界物と手を切って、純粹に精神的な領域へと入ることになる。取相が得られたら、その場所を離れなければならない。すぐに自分の住居に入り、そこで取相に精神を集中するのである。地遍の場所から自分の住居へ戻る際、入口で足を洗っているとせっかくの精神集中が乱れてしまうから、あらかじめ靴を穿き、杖を用意しておいたほうがよい。住居内で坐っているうちに取相が消えてしまったら、また靴を穿いて地遍のあるところへ行って見つめ直し、取相を取り戻す。取相を定着させ、これを繰り返して観察していると、やがて似相(paṭibhāga nimitta)が得られる。取相は、心の対象ではあるが、地遍を心に焼き写したようなもので、未だ外界物の具象性を残している。しかし似相になるともはや色も形もない、純粹相となる。これは実際に禅定修

行をしている者にしか認識できない状況なので私にはこれ以上の説明は不可能であるが、とにかく具体的な形相を越えた、純粹に精神的な何らかの様相であるとされている。この似相が得られたら、それを繰り返して修習する。そしてそのあいだに、初禪の障害となるいくつかの煩惱(五蓋)を減していかなければならない。煩惱が減していく段階を近行定 (upacāra samādhi) という (有部の未至定にあたる)。この近行定を極めた時に安止定 (appanā samādhi) という最終状態に到達するが、これこそが初禪の境地である。しかしながら、近行定から安止定へと進み行くことは大変困難なことなので、近行定で停ってしまって先へ進めなくなることがおおい。そんなときは無理せずあせらず、それまでに得られた境地を大事に守っていろいろ工夫しながら修行の進展を試みるのがよい。たとえば住居を替えてみるのもよろしい。一箇所に三日くらいずつ住んでみて、精神集中に適した場所を探すのである。ほかに、乞食に行く村を厳選する、無駄口をやめる、つきあう人を選ぶ、自分にあった食物をとるようにする、自分にあった時節を選ぶ、行住坐臥のうち自分にあった修行形態を選ぶ、等の工夫がある。それでもだめなら、さらに十種の奥の手がある。

- 1 身体、衣服、住居の汚れを取り、身边を清潔にする。
- 2 煩惱を押さえ、我々を悟りへと導く五つの心(五無漏根)が相互のバランスを失わないように注意する。
- 3 地遍等の対象の相を消さないための工夫をする(内容不明)。
- 4 心が沈んだ状態にある時は、それを昂揚させる修行を行なう。
- 5 心がうわついた状態にある時は、それを鎮静させるための修行を行なう。
- 6 心が楽しまない時は、世の中の苦を厭離することによって心を喜悅させる。
- 7 心のバランスをとるべき時には、正しくバランスをとる。
- 8 禪定に熱心でなく、精神が集中していない人に近づかない。
- 9 禪定に熱心で、精神を集中させている人と付き合う。
- 10 禪定を尊重し、それに向って邁進する。

6 神通力の獲得方法

漠然としすぎていて奥の手というほどのものではないけれど、とにかくこのような方法で安止定への入定が可能になる。いよいよ近行定から安止定へ進む場合、ウォーミングアップから勢いをつけて一気に安止定へと入ることになる。人の資質によって所要時間には二通りあり、速い人で七刹那、遅い人で八刹那⁷⁾かかる。その最後の一刹那が目的の安止定(今の場合なら初禪)である。初めて安止定に達した際には、そこに留まれる時間はたったの一刹那、つまり達したとたんに落ちてしまう。落ちて普段の精神状態に戻ってしまうのである。一旦安止定に達した者は、今度は安止定から落ちないことを目的として修行を続ける。先程、近行定の段階で煩惱(五蓋)を減すると言ったが、初めて安止定に達した段階では、実は煩惱は消え去ったわけではなくて、作用が現われないよう一時的に押さえ付けられていたにすぎない。だから一刹那で安止定から落ちてしまうのである。したがって安止定に留まるためには、煩惱を除去するように努力を続ける必要がある。それと同時に、すでに獲得した似相を増大させねばならない。近行定の段階で獲得した似相を細かく細分し、その各部分を領域として精神の集中度を高めていくのである。そして次第に分割を粗くしていき、最終的には似相全体に対して最高度の集中を行なうようにする。これらの修行によって、修行者は自在に安止定に入ることができるようになる。この場合、次の五つの自在が得られる。

- 1 引転自在 (*āvajjana vasa*)—いつでも自由に安止定へのウォーミングアップを始めることができる。
- 2 入定自在 (*samāpajjana vasa*)—いつでも自由に安止定へ入定することができる。
- 3 在定自在 (*adhiṭṭāna vasa*)—安止定に留まる期間を自分で決定することができる。
- 4 出定自在 (*vuṭṭhāna vasa*)—好きなときに出定することができる。
- 5 観察自在 (*paccavekkhaṇa vasa*)—各段階の禪定の主要な心(支)を自由に観察することができる。

この五自在の獲得をもって、安止定(いまの場合なら初禪)の獲得が完了したこ

とになる。

初禪をマスターしてさらに上の段階に進みたい時は、初禪の欠点を観察し、第二禪をめざして修行することになるが、修行方法は初禪の場合と同じである。もちろん第二禪のほうが高度であるから、修行者もより高度な精神状態が要求されるのだが、具体的な手順は変わらない。ただ、Visuddhimagga ではっきりしないのは、もう一度、土の円盤のような外界物の観察から始めるのか、それとも取相あるいは似相といった心的対象の観察からでよいのかという点である。おそらくは後者であろうと思うが断定できないので保留しておく。このような手順を繰り返すことによって、神通力獲得の必須条件である、第四禪到達が可能になるのである。以上、地遍を例にとって修行方法を説明した。その他の業処についても Visuddhimagga には詳しい説明があるが、ここでは極く簡単に記しておこう。

地遍を第一とする十遍であるが、これらはいずれも、過去世での入定経験の有無によって二通りの形がある。過去世での入定経験があるものは、自然界の諸物をそのまま業処として用いることができるが、経験のない初心者は、そのために特別の人工物を作らねばならない。それぞれの場合を下に記した。

地遍	(説明済)
水遍	自然 池、海等 人工 清澄な水を容器に満たしたもの
火遍	自然 灯火、かまどの火、山火事等 人工 焚火の上に直径一わたりと四指の穴をあけた皮または布を広げ、この穴を通して下の火を見る
風遍	自然と人工の区別なく、風にそよぐサトウキビ、竹、木、髪の手を見たり、皮膚にあたる風を感じたりする
青遍	自然 青い花や宝石等の自然物 人工 青い花を摘んで容器に詰め込み花びらだけが表面を覆うようにしたもの、青い布を容器に詰め込んだもの、青い染料で作った持ち運び用あるいは据え付け型の円形模様

(kasiṇamaṇḍala)

黄遍

赤遍

白遍 以上三つは青遍に準ずる

光明遍 自然 日光や月光が穴を通過して壁などにつくる光の円盤，あるいは木の間をもれて地上につくる円盤

人工 穴をあけた瓶の中に入れた灯火が，穴越しに壁に投影してつくる光の円盤

限定虚空遍

自然 壁の穴等

人工 壁や皮，箆にあけた直径一わたりと四指の穴

次の十不浄は，どこそこに死体があると聞いた時，実際そこへ行って観察するものである。死体のある場所はたいてい危険な場所なので，行く前に必ずその旨，他の比丘に告げておくこと。途中の道の様子をしっかりと頭に入れながら，できれば死体の風上から近づく(死臭を避けるため)。そしてその死体を様々な面から(たとえば，色，形，置かれた方位等)綿密に観察するのである。もし死体が起き上がって自分を追いかけてくるのではないかという恐怖心が生じた場合は，まわりの情景を観察し，「まわりの草石が私を追ってくるならこの死体が私を襲うこともある。しかしそんなことはないのだから，死体が私を襲うはずはない」と考え，笑って，恐れを取り除く。このように観察して，その場で取相，似相が得られればそれに越したことはないが，似相が得られない場合は，住居に戻って精神集中を続ける。だが時には，途中で人に会って挨拶しているうちに取相が消えてしまうこともあるし，修行中に忘れてしまうこともあるだろう。そんな時はもう一度死体のところへ戻ってやり直せばいいのだが，危険でもあるし，また死体の腐敗がすすんで先程と状況が変わってしまうこともある。それゆえ，引き返さなくても現場の状況をはっきり思いだせるように，途中の道の様子も頭に入れておかねばならないのである。以上のことが十不浄のすべての段階にあてはまる。Visuddhimaggaでは十不浄に関してさらに詳細な説明が続く

が、実際の修行作法については上の説明で事足りると思うので残りは省略する。

身至念は、人体を形作る三十二の臓物を嫌悪すべきものとして観察することである。最初阿闍梨に従って、三十二の一つ一つを口に出して唱え、それからその各々について綿密に観察していくとやがて似相が生じてくる。

安般念は、呼吸を観察する修行方法である。阿闍梨からしっかり教わったのち、一人で坐り安般念に入る。この業処は他の業処と違って修行がすすむにつれて次第に細く、薄れていく。そうして呼吸が細くなった時に似相が生じるのである。

四梵住は、慈・悲・喜・捨のそれぞれの心を何らかの具体的な対象に向けることから出発して次第に自他の区別をなくしていくことによって安止定を得ることができる。

以上、第四禅までの修行過程を説明した。次に第四禅に達した者が神通力を身に付けるための修行方法を述べていく。まず神通力にはどのようなものがあるのか見ていこう。

神通力（以後、伝統的訳語にしたがって神通とする。abhiññā）には次の五種類がある。

- 1 神変 (iddhividhā)
- 2 天耳界智 (dibbasotadhātu ñāṇa, 天耳通)
- 3 他心智 (cetopariya ñāṇa, 他心通)
- 4 宿住随念智 (pubbenivāsānussati ñāṇa, 宿命通)
- 5 有情死生智 (sattānaṃ cutūpapāte ñāṇa あるいは dibbacakkhu ñāṇa, 天眼通)

このほか、解脱にとって最も重要な漏尽智 (khiṇāsava ñāṇa, 漏盡通) があるが、これは出世間の聖道作用であって、本稿で扱う世間的な超能力ではないので論及しない。

神変は、身体を自在に活用する能力で、思い通りに姿を変えたり好きなどろへ移動したりすることができる。天耳界智は、世界のあらゆる音声を聞き取

る能力。他心智は、他の有情の心を心によって知る能力。宿住隨念智は、自分の過去世の様子を知る能力。有情死生智は、天眼によって世界の様子をくまなく知り、さらに、そこで生存している有情の過去、未来、現在にわたる業の因果関係を理解する能力である。

どの神通も、獲得方法は基本的には同じである。第四禪に達したのち、そこから一旦出定し、自分が希望する神通を心に念じる。すると、初禪の獲得と同様の過程を経て七刹那または八刹那ののちに安止の状態が一刹那だけ得られる。これが神通の獲得である。最初は一刹那でもとの状態に落ちてしまうが、これを何度も繰り返し練習することによって五自在が得られ、いつでも、好きなだけ神通を使用することができるようになるのである。なんにしても、繰り返しの練習こそが肝要である。このようなことから、神通状態は初禪等のように特定の禪定段階として設定されるものではないが、実際の形態は、一つの独立した禪定として扱われていたことがわかる。そして形式上は、神通は第四禪に含まれるとされる⁸⁾。基本は以上のとおりであるが、各神通によって細部に異なりがあるので、神通の用法説明も兼て各論を記すことにする。

まず神通の第一、神変であるが、これは大きく次の十種類に分けられる。

(1) 決意神変 *adhiṭṭhānā iddhi*, (2) 変化神変 *vikubbanā iddhi*, (3) 意所成神変 *manomayā iddhi*, (4) 智遍満神変 *nāṇavipphārā iddhi*, (5) 定遍満神変 *samādhivipphārā iddhi*, (6) 聖神変 *ariyā iddhi*, (7) 業報生神変 *kammavipākajā iddhi*, (8) 具福神変 *puñnavato iddhi*, (9) 呪術所成神変 *vijjāmayā iddhi*, (10) 彼々処正加行縁成神変 *tattha tattha samāpāyogapaccayā ijjhanaṭṭhena iddhi*

この十種の神変のうち、今まで述べてきたような修行法によって得られるのは(1)決意神変、(2)変化神変、(3)意所成神変の三種だけである。ここに挙げた十種は、超人的な行為という非常に広い意味での神変であって、我々が今問題にしている、禪定階梯に組み込まれた神通としての神変以外のものも並べられているのである。(1)決意神変とは、本人の決意によって起こす、分身の術などの身体的能力。(2)変化神変とは、自分の姿を隠したかたちで起こす神変で、たと

えば、提婆達多が自分の形を童子に変えて阿闍世太子に近づいた例が挙げられる。(3)意所成神変とは、その者が一旦自分の身体を空洞にし、そこへ希望する身体を造り、その身体をあたかも剣を鞘から抜くようにして引き出すことによって化身を作り出す神変である。(4)智遍満神変とは、将来阿羅漢になる予定の者、あるいは阿羅漢になった者が、その智の力によって起こす神変である。たとえば、今生で阿羅漢になると決っている者が赤ん坊の時、不思議な現象によって災厄から救われるような場合がこれにあたる。(5)定遍満神変とは、禅定に入っている者に現われる超能力であって、禅定に入っている舎利弗の頭を夜叉が力一杯殴っても、舎利弗が全く苦痛を感じなかったという例がある。(6)聖神変とは、聖者にのみ可能な神変である。これは超能力というよりも、心理的な能力であって、世間では厭わしいとされているものを逆に好ましいものと感じ、好ましいものを厭わしいと思う等の作用である。(7)業報生神変は、過去の業の果として生まれつき備わる能力である。たとえば鳥が空を飛ぶのも、天や夜叉の飛行能力も業報生神変と考えられている。(8)具福神変は、本人の福德の力によって生ずる不思議な能力のことで、転輪聖王が軍隊を連れて空を飛んだり、立派な居士に奇跡が起ったりする場合がこれにあたる。(9)呪術所成神変とは、呪術師が呪文の力で様々な不思議を行なうこと、最後の(10)彼々処正加行縁成神変は、正しい修行道によってすぐれた結果を達成すること、あるいは技能の修得によって素晴らしい成果をあげることであるとされている。

禅定階梯と関連するのは初めの三つであると言ったが、その第一番目、決意神変はさらに十種に細分される。

- i 一身を多身とする神変—「自分の身体を多身にしよう」と念じて起す神変。分身の術である。現われる身体の数はい任意に決めることができる。また、特に決めなければ、現われた多身は、元の神変者と全く同じ形になり、神変者と同じ行動をとる。しかし、念じる時に指定すれば、姿も行動も自分の思いどおりに決めることができる。
- ii 多身を一身とする神変—iの一身多身神変を実行中、その多身を一身に戻りたいと思う者は、この神変によって多身を一身に戻すことができ

る。初心者の場合、先ず第四禪に入定、出定してから起すことになる。

iii 顕現の神変—暗闇に光を生ぜしめたり、途中の障害物を取り払ったり、あるいは遠くのを近くにあるかのようにして、本来見えるはずのないものをみんなに見えるようにする神変。

iv 隠匿の神変—iiiの逆で、本来見えるはずのものを見えなくする神変。⁹⁾

v 障礙をなくす神変—壁や山など途中の障害物をなくして、あたかも虚空に行くかのように移動する神変。この神変を得るためには、最初に禪定に入る時、業処として十遍の第八である虚空遍を使わねばならない。そして障害物を想念し、「虚空となれ」と念じることによってこの神変が得られるのである。ところで、自分がこの神変によって移動している最中、他の者が何らかの神通によって山等の物体を現出させた場合、どちらが優先するかという問題が生じる。これは、先に生じた神通のほうが強いので、自分の神変が先なら、「虚空となれ」と念じることによって消すことができるが、相手の化作のほうが先なら、こちらはその障害を避けて行かねばならないのである。

vi 地中に出没する神変—大地をあたかも水のように変えて、そこで潜ったり浮かんだり、あるいは沐浴、飲水、洗顔、洗濯をしたり、さらには容器に汲み取ったりする神変。業処として水遍を用いる。神変を念じる際は、「これだけの場所の地は水になれ」と念じる。水以外にも酥、油、蜜、砂糖水等の液体に変えることもできる。この神変を実行中、その大地は、他の人々にとっては依然として大地のままだが、「他の人にとっても水になれ」と念じれば、他の人にとっても同じ神変が起こる。

vii 水上で沈まない神変—viとは逆に、水をあたかも地面のように変えて自由に行動する神変。業処として地遍を用いる。地面以外にも宝珠、黄金、山、樹等に変えることもできる。

viii 飛行神変—結跏、横臥、歩行などの姿勢をとりながら空中を移動する神変。地遍によって入定し、神変を念じる時は、それぞれの姿勢をとるのに必要なだけの広さの場所を限定して「地となれ」と念じる。明記は

されていないが、この化作した地面に乗って、空とぶジュウタンのような状態で飛行するものと思われる。この神変を行なう者は、必ず同時に天眼も持っていなければならない。なぜなら、飛行中の障害物や降り立つべき適当な場所を天眼で見なければならないからである。

- ix 日月に触れる神変—太陽や月に触ったり、その表面を手で撫でたり、あるいはその上に坐ったり寝たりする神変。日月が近くにやってくる、それに手で触れることもできるし、手を日月のところまで伸ばして触れることもできる。同時に多数の者がこの神変を行っても、一人一人が別個に日月に触れることができる。一個の月が千の鉢の水にそれぞれ別個に映るようなものである。

- X 身自在神変—梵天界に至る範囲で化身を作って自由にあやつる神変
(実際はもっと煩雑)

他の二つの神変、変化神変と意所成神変についてはすでに説明したとおりである。これで神変の説明を終って、その他の神通をみてみよう。

天耳界：天耳通は、世界中のあらゆる音声を聞き取る神通である。第四禪から出定したのち、自然界の音を、麤なるものから細なるものへと順に聞き取っていく。これを十方にわたって繰り返し行なうと、やがて安止心が生起して天耳通が得られる。一旦これが得られたら、次は自然界を多数の領域に細分し、各領域毎に集中度を高めていく。これによって五自在が獲得でき、完全な天耳通を手に入れることができる。

他心智：他の有情の心を知る神通。この智を得るためには、まず天眼を持たねばならない。天眼で他の有情の心臓付近の血の色を見るのである。血が赤ければ喜心、黒ければ憂心、澄んでいれば捨心が生じているということがわかる。この力が強力になってくると、天眼なしでも、すなわち血の色を見なくても無色界に至るまでの他の有情の心を知るようになる。この場合の他心智は、他人の考えを読み取るものではなく、その心が十六種の心の状態のう

ちのどれに属しているかを判断するものである。十六種とは、有貪、離貪、有瞋、離瞋、有癡、離癡、沈鬱、散乱、高大、不高大、有上、無上、等持、不等持、解脱、不解脱である。

宿住随念智：自分の過去世の様子を知る智。ただし仏の宿住随念智だけは、他者の過去世の様子を知ることもできる。この神通があるのは次の六種の人である。

- 1 外道一外道は四十劫の昔まで思い出すことができる。その場合、目的の箇所を探し当てるためには、現在から順を追って思い出していかなければならない。ちょうど、カセットテープの中の曲を探すとき、初めから順に聞いていって目的の曲を見つけだすようなものである。
- 2 普通の声聞一百千劫の昔まで思い出すことができる。外道のように、順を追って思い出す方法と、死と結生による跳入の二と通りの方法が可能である。死と結生による跳入とは、死んで生まれ変わる時を一つの区切りとして、この区切りを辿って思い出していく方法であって、カセットテープでいえば、頭出しの機能によって選曲するようなものである。
- 3 八十人の大声聞一十萬劫の昔まで思い出すことができる。普通の声聞と同じく、順を追って思い出す方法と、死と結生による跳入の二と通りの方法を用いる。
- 4 二人の第一声聞（舍利弗と目連）——阿僧祇と十萬劫の昔まで思い出すことができる。方法は、死と結生による跳入を用いる。
- 5 独覚——阿僧祇と十萬劫を思い出すことができる。第一声聞と同じく、死と結生による跳入を用いる。
- 6 仏一際限なく思い出すことができる。順を追って思い出す方法も、死と結生による跳入も用いることなく、任意の時を即座に思い出すことができる。フロッピーディスクに見られるランダムアクセス機能のようなものである。

ここでは、普通の人が修行によって獲得する神通のことを説明しているから、得られるのは2の「普通の声聞の宿住随念智」である。その獲得方法は次のとおり。第四禪から出定したのち、直前のことを思い出す。そこから順に時間を遡って過去のことを思い出ししていく。もしはっきり思い出せないことがあったら、第四禪への入定出定を繰り返して正確に思い出すようにする。こうするうちに、今の人生が始まった最初の瞬間(結生)にまで記憶が到達する。さらに努力すると、前生の最後の瞬間を思い出せるようになる。すると、これを所縁として七または八刹那で宿住随念智が生じる。あとはこの能力を強化して五自在を得れば、過去世のことを自由に思い出せるようになるのである。

死生智(天眼智)：これは世の有情の有様を知り、それが過去世、未来世とどのような因果関係で繋がっているのかを理解する神通である。したがって、世の有情の有様を知る力(天眼 *dibbacakkhu*)と、過去世、未来世との因果関係を知る力(随業趣智 *yathākammūpagañāṇa*、未来分智 *anāgatamsañāṇa*)の二つの要素から成っているとされる。火、白、光明の三遍のうちのいずれかを業処として第四禪に到達し、さらに肉眼でみえない物を見るように努力することによって七または八刹那で死生智が得られることになる。

以上神通力の獲得方法について *Visuddhimagga* の説をできるだけわかりやすく紹介した。一見、非現実的な空想上の方法とも思えるが、*Visuddhimagga* という書が一種の修行マニュアルとしての側面を持っていることから見て、これは決して絵空ごとではなく、実際に出家者たちが行っていた修行のやり方を表していると考えべきである。そしてその特徴は、定まったコースの反復練習にある。一定のコースを、反復練習によって一步一步昇ってゆき、資質によって遅速の違いはあっても、最終的には誰もが同じ状態に到達する。これは禅宗のいわゆる頓悟とは全く共通するところのない別個の修行形態である。インドと中国の仏教を比較する際、常に問題とされる漸悟、頓悟の違いは、このような具体的な修行法の比較によってこそ、はっきりと理解することができる

であろう。

- 1) C. A. F. Rhys Davids, *The Visuddhi-Magga of Buddhaghosa*, Pali Text Society London 1920-1921. その他の関連資料に関しては森祖道『パーリ仏教注釈文献の研究』山喜房仏書林 1984. pp. 17-20 を参照せよ。なお水野弘元による日本語訳は、注釈書も参照して書かれたもので極めて信頼できる訳である。『南伝大蔵経』62, 63, 64巻。
- 2) 森祖道「Visuddhimagga 著述事情考」『佛教研究』第2号, 1972, pp. 115-100.
- 3) 以下、本稿では、第四禪獲得のために行なうべき具体的行動を説明していく。これらの行動の根底には体系的な心理理論が存在するのだが、それは敢てとりあげない。Visuddhimagga の心理作用に関しては水野弘元の詳細精密な研究があるのでそちらを参照せよ。水野弘元『パーリ佛教を中心とした佛教の心識論』山喜房仏書林1964, 禪定作用および神通作用については pp. 919-927.
- 4) 水野 pp. 919-921; *Visuddhi-Magga* pp. 118-372, 全体の三分の一以上が業處の説明に費やされている。
- 5) 詳しくは水野 p. 922 の表を見よ。
- 6) *Visuddhi-Magga* pp. 118-169; 水野 p. 923.
- 7) この際の心理的過程に関しては、水野 pp. 924-925.
- 8) *Visuddhi-Magga* p. 387: *taṃ pudde vuttaṃ appanācittam iva gotrabhū anantaram ekam eva uppajjati rūpāvacaracattahajhānikam.*
- 9) iii, iv に関しては別の解釈もある。神変を起こしている間、神変者自身の姿も見えるような神変を顕現神変、神変者の姿が見えなくなる神変を隠匿神変とするのである。*Visuddhi-Magga* p. 393.